



## 読者の広場

### 一つの近況

元放射線医学総合研究所

喜多尾 憲助

kitaoken@aol.com

最近幻覚を経験した。ひどい胆のう炎の治療でこの6月に入院したときのことである。

左腹が痛く、我慢していたら右肋骨の下が突き上げるように痛み出した。X線検査の際の深呼吸ができないほどになった。入院すると直ちにリンゲルと抗生剤の点滴である。二日ほどは医師も不思議がるほど熱は出なかったが、三日目に急に熱が上がった。夕方の検温では39.8度になり、解熱剤を飲み頭と両脇を冷やし、毛布にくるまった。すると目の前を、左右上下に並んだトランプが右から左へ流れてゆくのである。トランプのスーツは全て黒、絵札はない。眼をつぶると見えるのか、眼を開いていても見えるのかははっきりしない。夢か幻かというのは、このようなことをいうのだろうか。とにかく汗をかき多少熱が下がるまで何度となく見た。何でこんな幻覚を見るのか、別にブラック・ジャックにはまっていたわけでもないのと思ったが、そのうち、どうやらフリーセルをやり過ぎたためかもしれないと気がついた。入院するまで毎朝パソコンのスイッチを入れるとまずフリーセルをやり、考えに詰まるとフリーセル、退屈するとフリーセルという具合だったからだ。フリーセルは考えに考え抜いてやり遂げるといほどのものではない。何事も努力や苦勞がなければ達成感も湧かないし、失望感も味わえない。メリハリのない行動、達成感も敗北感もない行動は惰性的になると言ったら大げさかもしれないが、フリーセルがその一つの例かと思う。むろんそれはこうしたゲームに限らない。全部お仕着せ人任せの観光ツアーも達成感に乏しいようで、そのようなツアーに繰り返し参加する人の中には、惰性で行く人もいるらしい。しかしどうせ見るならもう少しましな幻覚を見たいものだと思い、今後フリーセルを一切やるまいと決めた。以来二ヶ月半になる。

胆のうの治療のための内科病棟入院は20日間に及び、退院1週間後、再び外科に入院して腹腔鏡下での胆のう除去手術を受けた。こちらは9日間で退院した。X線検査は合計5枚、CT検査も3回、うち1回は造影CTで、かなり放射線を浴びた計算になる。おそらく現役で実験していたころよりはるかに多いだろう。点滴を受けると小便が近くな

る。ほとんど一時間おきに便所へ行く。量も多い。体内に入った水分の倍は出るような気がする。筋肉中の水分も抜けるのではないだろうか。点滴 10 日ともなると体重も筋肉も確実に落ちる。退院したときには 6 キロほど減っていた。とにかく、これほど長く入院したのは生まれて初めての経験なので、それなりに勉強になった。深い呼吸ができないためか、血液中の酸素濃度が不足し、酸素を補給するパイプを鼻腔に着けさせられるなどというのも初体験だった。病棟には洗濯機や乾燥機があり、TV や冷蔵庫と共通のプリペイドカードが使える。コンビニ風の売店もあるから、一人暮らしの者が入院しても不便なことはなかろう。病室生活ではパジャマ、スリッパというのが定番だが、病室といえども外と変わらない。何処でも土足である。スリッパでパジャマの裾を引きずるといような風体は、裾で病院中を掃除して回っているようなので、寝たきりになった場合以外は避けるべきで、ステテコ&T シャツの方がむしろ「衛生的」である。この病院は国立で、今は独立行政法人の看板を出している。土日休日は、会計の窓口も開かないから退院もできない。支払済の確認書を病棟のナースステーションに出さないと退院させてもらえないからである。外泊という手もあるが、入院費・食事代はとられる。昔は大安の日を選んで退院するなどということもあったようだ。さる病院で午前中に退院、午後に入院させると、1 日で二人分の入院費が稼げるということを考えつき、方々の病院でそれを採用するようになったという。別の病院の話だが、点滴だけで食事は出なかったのに、請求書には食事代ががっちり計上されていたそうだ。金曜に入院すると、月曜まで診断や検査を待たされるなどということもあるから、入院する場合にはタイミングが大切である。要するに、患者様の都合などではなく病院側の理論・手順で動いているのだ。胆のうをとった後はしばらく脂っこい食べ物は摂るなといわれ、手渡された印刷物にもそう書いてあったが、手術後普通食になったとたんに、鱈のフライが出てきたのには驚いた。医師にそのことを言ったら、食べなければいいですよと、こともなげに言っただけだったのでさらに驚いた。何とか体力をつけようと薄味の食事を全部平らげるべく努力しているこっちの身にもなってくれよ、といいたくなる。普通食を食べて二日ほどたつと、おかずを特別に注文できるとのメモが回ってきた。

胆のうは *cholecyst*、*vesica fellea*、*gallbladder* という。胆石は *gallstone*、石というからなにやら白っぽい硬い塊を予想していたが、手術後渡されたものは、サプリメントの錠剤のようで、色は薄茶で透明、大きさも形もアリナミンそっくりであった。医学辞典によると、この石はコレステロールの結晶で、カルシウムが混ざっていることもあるという。英語で、胆石の別名は *cholerith*、いわゆるコレステロールの名は、この物質が胆石の中から見つかったことに由来する。超音波診断では胆のうの出口に *sludge* 状のものが詰まっていると内科の担当医がいていたが、そちらはなかったようだ。胆のうは、肝臓の下にあり、西洋なしの形をした伸縮自在の袋である。肝臓で作られた胆汁を溜めておき、脂っこいものを食べると、胆汁を十二指腸に出して消化を助ける。胆汁は肝臓で作られ

るのだから「肝汁」でも良さそうなものである。

胆のうの「のう」は袋のことで、背囊や土囊で使われている。字書「大字典」(講談社)によれば、口部、総画数 22 画。ワ冠の下に口が二つ並ぶのが正字で、これをハにするのは略字であるという。電子辞書の漢字辞書などにあるのはこの略字の方だ。「囊」の項に「囊沙之計」という四字熟語が載っていた。楚の竜且と川を挟んで対峙していた漢の韓信が、土囊で川を堰き止め、まず川を渡って竜且軍を攻め、負けたふりをして退却、勝ちに乗り追撃してきた竜且軍が川に入ったところを見計らって土囊を崩し敵の大半を溺れさせ、壊滅させたという故事である。ちょうど胆汁がどっと出るようなものだ。胆のうに「囊」いう字を使った昔の医学者はさすがである。

韓信といえば、たしか「修身」の教科書に載っていた「韓信の股くぐり」の主人公である。真に豪胆な男は、不良どもに絡まれても相手にせず、屈辱に平然と耐えたという話である。オリジナルは史記列伝に載っており、それによると韓信は立身の人である。漢王に仕えさまざまな功績を立てたが最後は謀反の廉で一族諸とも殺されてしまった。列伝には各巻(章)末尾に太史公曰く、として作者司馬遷の短いコメントがある。「……もしも韓信が道理を学び、謙虚で、自分の功績をほこらず、その才能を鼻にかけなかったらば、ほとんど理想的な人となれたであろう……」(小川他訳、岩波文庫)

胆汁は *bile*、*gall* であるが、これらの英語、前者は癩癩、不機嫌、後者は厚かましき、凶太さの意味で使われる。胆のうを除去したおのれも、それまでの控え目の性格が一変し、簡単に癩癩玉を破裂させたり、いよいよ凶々しくなったりの、嫌われ老人になるのではないかと心配するようになった。そういえば昔、何が気に入らないのか、洗面顔の老人をよく見かけたが、彼らも胆のうをとったことがあったに違いないと思う昨今である。